

分断と不信、漂流する祭典

コロナ下の東京五輪が開幕した。毎日 24 日社説冒頭から。これほど逆風にさらされ、開催を疑問視されたオリンピックは戦争時を除いてなかっただろう。新型コロナウイルスの感染拡大に伴う 1 年の延期を経て、57 年ぶりの東京五輪が開幕した。新設の国立競技場を埋め尽くす観客はいない。世界から集まった選手たちは、歓声の響かない開会式で入場行進した。感染防止のため選手たちは外部と接触しない「バブル方式」で選手村と競技会場を往復する。社会から隔絶された異例の五輪だ。コロナは、ナショナリズムと商業主義で肥大化した五輪から「祝祭」という虚飾を剥ぎ取り、実像を浮き彫りにした。

朝日 23 日の表題社説も抜粋して紹介する。

分断と不信のなかで幕を開ける、異例で異様な五輪である。五輪のような巨大イベントには意見の対立はつきものだ。逃げずに議論を重ね、社会のおおよその合意を得て、次のステップに進む。その営み抜きに成功はあり得ない。ところが東京五輪の歩みは全く違った。

16 年大会の招致に失敗すると東日本大震災からの復興を目的に持ち出し、当時の安倍首相は原発事故の影響を「アンダーコントロール（管理下にある）」と国際社会にアピールした。現実を欺くこの演説などで招致を果たした後も、コンパクト五輪構想の破綻、経費の膨張、招致をめぐる買収疑惑、責任者の相次ぐ交代など、運営の根幹を揺るがす事態が続いた。

理念と説明を欠き、不都合なことには目をふさいで暴走する体質は、コロナ禍が起きても変わらず、一層顕著になった。

大会の 1 年延期が決まった昨春、安倍氏は今度は「最高のコンディション」「完全な形での実施」を約束した。夢物語なのは明らかだったが、路線を踏襲した菅政権は軌道修正できぬまま、科学的知見や国民の不安を無視して突き進んだ。この状況下で考えられる選択肢とそれぞれの長短を示し、情報を公開して、あるべき大会像を探る。そんな姿勢は最後まで見られなかった。五輪といえばどんな無理も通るというおごりと、根拠なき楽観論の行き着いた果てが、「緊急事態宣言下での無観客開催」といえる。

主催者が引き続き全力を傾けるべきは、言うまでもなく感染防止策の徹底である。入国した選手や関係者か、ウイルスを拡散させないのはもちろん、「日本発」のウイルスを持ち帰らせないようにしなければならない。

東京は感染が急拡大し、医療逼迫の懸念が高まる。国籍や属性を問わず、生命と健康を守ることを最優先課題と位置づけ、中断・中止の可能性も排除せずに大会に臨む必要がある。

(2021 年 7 月 26 日)